様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７８７

研究課題名（和文）Dickensの後期小説における男性らしさとその形成への帝国周縁部の役割

研究課題名（英文）The Definition of Masculinity and the Formation of Masculine Identity and Authority in the Imperial Periphery in Dickens's Later Novels

研究代表者
長谷川　雅世（Hasegawa, Masayo）

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・講師

研究者番号：３０４２３８６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の主目的はCharles Dickensの男性観を明らかにすることで、主として以下の3つがわかった。1つ目は、Dickensにとっての男性らしさとはそれ自体で存在するものではなく、女性らしさとの相違や対比によって存在しうるものであったこと。2つ目は、イギリス国内を舞台にして、男性主人公が男性らしさを形成したり獲得したりする物語を書くことに困難を感じていたこと。3つ目は、Dickensが男性主人公たちの男性としての成長物語をイギリス国内を舞台にして描くことに困難を感じていた根源は、Dickensが基本的には、ヴィクトリア朝の矛盾だらけのジェンダー・イデオロギーの信奉者であったことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の主たる学術的意義としては、以下の3つが挙げられる。1つ目は、従来のDickens研究ではあまり注目を集めることのなかった男性登場人物にも焦点をあてることで、Dickensの男性観に新たな読みの可能性と解釈を与えたこと。2つ目は、従来の批評ではDickensにとって帝国周縁部は円滑に進めるための舞台装置でしかないと単純に解されてきたが、その使用には彼の女性に対する恐怖心と彼のジェンダー観の矛盾が集約されていることを明らかにしたこと。3つ目は、Dickensの後期小説分析を通して、当時のジェンダー・イデオロギーの曖昧さや矛盾を指摘することで、ヴィクトリア朝のジェンダー研究にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed at analyzing Dickens's views on masculinity, and its main three findings are as follows. First, Dickens felt that masculinity was not an independent entity but it was as differences from or a contrast to femininity. Second, Dickens felt difficulties in writing a story where his hero would establish and acquire his masculine identity and authority on the domestic stage of Victorian England. The third finding is that Dickens's difficulties result primarily from the fact that he essentially espoused Victorian ideologies of gender which were riven with contradictions.

研究分野：イギリス文学

キーワード：チャールズ・ディケンズ　ジェンダー　男性らしさ　大英帝国周縁部

１．研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝に関する従来の研究では、ジェンダーと言えば女性が中心で、女性らしさ（femininities）については大いに議論される一方で、男性らしさ（masculinities）についてはそうではなかった。だが 1990 年代に、Herbert Sussman の *Victorian Masculinities: Manhood and Masculine Poetics in Early Victorian Literature and Art*（1995）、James Adams の *Dandies and Desert Saints: Styles of Victorian Masculinity*（1995）、そして John Tosh の *Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*（1999）といったヴィクトリア朝の男性像を明らかにする研究が相次いで世に出され、これ以降現在に至るまで、男性らしさがヴィクトリア朝研究の主題として関心を集めている。そしてこの傾向は、ヴィクトリア朝を代表する作家である Charles Dickens 研究にも見られる。

しかし、これまでの Dickens の男性観の研究では、男性登場人物が主人公である *David Copperfield* や *Great Expectations*、そしてこれらの主人公である David や Pip に考察対象が集中してきた。一方で、女性を主人公とする作品や女性主人公の伴侶となる男性登場人物たちに、批評家の関心はあまり向けられてこなかった。特に、*Dombey and Son* の Walter や *Bleak House* の Woodcourt は、従来の Dickens 研究全体においても深みのない登場人物として無視されてきた。本研究はそのような作品や登場人物をも考察対象にすることで、Dickens の男性観に新たな読みの可能性と解釈を提示しようとした。

また、Dickens の後期小説では、往々にして、男性登場人物が国外へと送られたり、そこから帰国したりするが、彼らのそこでの経験が詳細に語られることはほとんどない。それゆえ、Dickens 小説における国外、換言すると大英帝国周縁部は、物語を都合よく進めるための舞台装置でしかないと見なされてきた。しかし、Dickens の後期小説では、19 世紀末に流行した帝国冒険物語でと同様、植民地を中心とする帝国周縁部が、男性主人公たちの人物造形、特に彼らの男性らしさの形成に重要な役割を果たしていると推測できた。そこで本研究では、男性主人公たちの帝国周縁部での経験に Dickens が与えた意義を考察することを通し、彼の男性観を明らかにしようとした。

２．研究の目的

本研究は、Charles Dickens の後期小説（*Dombey and Son, David Copperfield, Bleak House, Hard Times, Little Dorrit, A Tale of Two Cities, Great Expectations, Our Mutual Friend, The Mystery of Edwin Drood*）を分析し、Dickens にとっての男性らしさを明らかにしようとした。ここでの男性らしさとは、男性らしさの定義や理想の男性像や男性らしさ形成のあり方を含む。さらに、後期の個々の小説が提示する男性らしさを通観し比較することで、Dickens の男性観の変遷を明らかにすることも試みた。

本研究が研究対象とする Dickens の後期小説では、男性主人公が必ず一度はインドや中国を始めとする大英帝国の周縁部へと送られる。そしてこのことが、男性主人公が獲得する男性らしさや彼らの男性らしさの形成に大きく関わっていると考えられた。そこで、男性主人公の大英帝国周縁部での経験に着目し、彼らの男性らしさ形成における帝国周縁部の役割という観点から、Dickens の男性観を明らかにしようとした。

さらに、Dickens の男性観を考察することは、必然的に、彼の女性観の考察を伴う。そして、Dickens の男性観と女性観の両者の考察は、彼のジェンダー観の解読にも繋がる。それゆえ、本研究は、後期小説から読み取れる Dickens のジェンダー観の全体像とその変遷を明示することも目指した。そして、それを明示することで、Dickens 小説におけるジェンダー研究だけでなく、ヴィクトリア朝全体のジェンダー研究に、新たな例証と見解を提示しようとした。

３．研究の方法

（１）本研究でまず行ったのは、ディケンズの一次文献、つまり彼の後期小説の分析である。特に重点的に分析を行ったのが、男性主人公の大英帝国周縁部での経験が彼らにハッピー・エンディングをもたらす *Dombey and Son* と *Bleak House* である。この段階では、男性主人公の帝国周縁部での経験とその結末に焦点を当てながら、後期小説を分析し比較した。これを通して、それぞれの小説で男性主人公によって前景化される男性らしさの特徴と、その男性らしさと帝国周縁部の存在との関係を明らかにした。同時に、前景化された男性らしさの特徴に影響を与える女性らしさやその男性らしさと対比される女性らしさの特徴も考察した。

（２）本研究では次に、個々の後期小説における Dickens の男性観を考察するうえで注目すべきヴィクトリア朝社会の思想や出来事を特定した。例えば、*Bleak House* に関しては、それは Sara Stickney Ellis が書いたコンダクト・ブックなどが強調した女性の道徳的影響力であり、*Great Expectations* に関しては、Samuel Smiles の *Self-Help* に見られるような男性の立身出世への野望を煽る世相であった。それから、これらのヴィクトリア朝社会の思想や出来事に関する一次・二次文献の収集と分析を行った。特にヴィクトリア朝時代の雑誌や新聞記事といった一次文献の収集は日本国内で行うのが困難であったため、大英図書館で 19th Century British Library Newspapers Database や 19th Century UK Periodicals Online を使って行った。

（3）（2）で特定した注目すべきヴィクトリア朝社会の思想や出来事を念頭に置きながら、（1）で明らかにした個々の小説の男性主人公の男性らしさの特徴を再考察した。このように Dickens の男性観をヴィクトリア朝時代の思想や風潮、特に当時のジェンダー・イデオロギーとの関係で考察することで、彼の男性観やジェンダー観と当時のイデオロギーとの関係が明らかにできた。そして、それを明らかにすることで、ヴィクトリア朝研究やヴィクトリア朝のジェンダー研究に更なる見解と例証を与えられると考えた。

（4）Dickens の後期小説に関する二次文献の分析を行いながら、上記（1）（2）（3）での考察結果をまとめ、投稿論文として研究成果発表をする準備を行った。また、投稿論文の査読者からのコメントを参考にしながら、本研究の方向性や考察方法などに関しての修正を行った。基本的には、考察結果をまとめる作業は、個々の後期小説ごとに行った。ただし、*Bleak House* の投稿論文に大幅な加筆修正が必要となり、再投稿から査読通過までに時間がかかったため、研究対象であった後期小説のうちの *Little Dorrit* と *Our Mutual Friend* と *The Mystery of Edwin Drood* に関しては、投稿論文にまとめるだけの十分な考察ができなかった。*David Copperfield* と *Hard Times* と *A Tale of Two Cities* と *Great Expectations* に関しては、論文投稿、或いは、論文再投稿の準備を進めている最中である。

４．研究成果

本研究の最大の目的は Dickens の後期小説に読み取れる彼の男性観を明らかにすることで、それについて主として以下の 3 つがわかった。

1 つ目は、Dickens にとっての男性らしさとはそれ自体で存在するものではなく、女性らしさとの相違や対比によって存在しうるものであったこと。ヴィクトリア朝時代、女性が自らを、他者、特に父親や夫などの男性との関係性によって存在する relative creatures と呼んだが、Dickens は男性もまた同様であるとした。しかし自分自身のこの男性観ゆえに、Dickens は理想的な男性を創造するのに苦労する。というのも、ヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーでは道徳性は女性の特徴で美徳であるとされていて、Dickens もこのイデオロギーを信奉していたが、その一方で、Dickens は理想の男性像の根幹は道徳的美徳だと考えていたからだ。それゆえ、理想的な男性登場人物を描き出す際に、彼が道徳性ゆえに女性的だと見なされ、彼の男性としてのアイデンティティや権威が損なわれない方法を模索しなければならなかった。その模索の痕跡と苦悩が、Dickens の後期小説には読み取れた。

2 つ目は、Dickens がイギリス国内を舞台にして、男性主人公が男性らしさを形成したり獲得したりする物語を書くことに困難を感じていたこと。それゆえ、後期の前半に書かれた *Dombey and Son* や *Bleak House* では、Dickens は別の舞台を必要とし、そこに帝国周縁部を選んだ。そしてこれらの小説では、帝国周縁部は男性が自然と理想的な男性に成長できる場所、男性にとっての一種の理想郷となっている。しかし、より後期の小説では、帝国周縁部に対するこのような Dickens の楽観的で非現実的な見方は影を潜め、同時に、Dickens は男性登場人物の男性としての成長物語の舞台をイギリス国内に戻して自らの困難に対峙することになる。

3 つ目は、Dickens が男性主人公たちの男性としての成長物語をイギリス国内を舞台にして描くことに困難を感じていた根源は、Dickens が基本的には、ヴィクトリア朝の矛盾だらけのジェンダー・イデオロギーの信奉者であったことである。例えば、彼は「家庭の天使」という女性の理想像を支持していた。この理想の女性像は、女性を家庭に束縛し、彼女たちの社会的役割と権威を奪う働きをしたが、同時に、女性たちが自分たちの道徳的優位性を主張することを可能にし、それが彼女たちの道徳的影響力を通しての女性が社会改善を行うという別の主張へと繋がった。結果、男性のアイデンティティと権威が脅かされることになった。ヴィクトリア朝社会は、このような矛盾に満ちたジェンダー・イデオロギーに支配されていた。そこを舞台にして、男性が確固たる男性らしさを身につける物語を書くには、その矛盾を解決しなければならなかった。しかし、それは Dickens には非常に困難で、時には不可能であった。なぜなら、Dickens はそのイデオロギーを信奉し、結果、自らのジェンダー観が同じ矛盾を抱えていたからである。

最後に、今後の展望としては、Dickens の後期小説における男性らしさの問題を、視点を増やして考察していきたい。本研究では、男性主人公の大英帝国周縁部での経験に着目し、彼らの男性らしさ形成における帝国周縁部の役割という観点から、Dickens の男性観を明らかにしようとした。しかし、後期後半の小説では男性主人公がイギリス本国に帰国してから物語が始まるものが多く、帝国周縁部の役割に対する解釈が推測になりがちであった。そこで、Dickens のジェンダー観の大きな特徴としてわかった「矛盾」をも観点にしながら、研究を続けていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①<u>長谷川　雅世</u> “The Hero Out of the Home in *Bleak House*: Dickens's Perceptions on Masculinity and Domestic Ideology”『中国四国英文学研究』(『英文学研究支部統合号』) 第

15 号 (第 11 巻), pp. 13 (289) -23 (299), 2019 年 1 月, 査読有り

②長谷川　雅世　"The Threatening Angel in *Bleak House*: Contradictions in Dickens's Characterization of Esther Summerson and Victorian Gender Ideology"『高知大学教育学部研究報告』第 78 号, pp. 193-201, 2018 年 3 月, 査読なし, URL: https://kochi.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7452&item_no=1&page_id=13&block_id=21

③長谷川　雅世　"The Reflection of Victorian Gender Ideologies on the *Dictionary of National Biography*: Perceptions of Women of Letters in the Late Victorian Literary World"『高知大学学術研究報告』第 65 号, pp. 113-122, 2016 年 12 月, 査読なし, URL: https://kochi.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7452&item_no=1&page_id=13&block_id=21

〔その他〕
ホームページ等
①長谷川　雅世　「書評 Carolyn Lambert and Marion Shaw, eds., *For Better, For Worse: Marriage in Victorian Novels by Women*」『ギャスケル論集』第 28 号, pp. 95-102, 2018 年 10 月

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：講師
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。